

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

6章 「奴隸生活から定住生活へ」

ヨシュア記1章

1. はじめに

(1) 創1章、3章、12章、出12章、20章を取り上げてきた。

- ①創造
- ②墮落
- ③アブラハム 契約
- ④出エジプト
- ⑤荒野での律法付与

(2) ヨシ1章

- ①荒野の40年は、贖われた民が「信仰を学ぶ学校」であった。
- ②荒野は神の声を聞く場所である。
- ③しかし、最終目的地ではない。
- ④神の約束が現実となる時が来る。
- ⑤その入口に置かれているのが、ヨシュア記1章である。

(3) ヨシュア記の特徴

- ①救済史の新たな進展を告げる書である。
- ②戦略を教える書である（神の導きによる戦いの原則）。
- ③今日の信者への教訓を多く含んだ書である。

神の物語を生きる者は、ヨシュア記1章から教訓を学ぶことができる。

神がヨシュアに語ったことばを分割すれば、4つの教訓を学ぶことができる。

I. モーセは死んだが、神の計画は進む。

1. 1～2節

**Jos 1:1** 【主】のしもべモーセの死後、【主】はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに告げられた。

**Jos 1:2** 「わたしのしもべモーセは死んだ。今、あなたとこの民はみな、立ってこのヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与えようとしている地に行け。

2. モーセは死んだ。

- (1) これは、非常に重い現実である。
- (2) イスラエルにとって、モーセは単なる指導者ではなかった。

- ①出エジプトを導いた人
- ②神と顔と顔を合わせた人
- ③海を分けた人
- ④彼を通して律法が与えられた人

### 3. しかし、神の計画に遅延はない。

- (1) 人は去っても、神は語り続けられる。
- (2) 神は「さあ、今、立ち上がり、このヨルダン川を渡れ」と命じた。
- (3) 神は常に次の一步を示される方である。

### 4. 適用

- (1) 神の働きは、偉大な人物によって支えられているのではない。
- (2) 神ご自身が主役である。
- (3) 教会も同じである。
- (4) 時代が変わり、指導者が変わっても、神の救済史は止まらない。
- (5) 過去がどうであったかではなく、今がどうであるかが問題である。

## II. 約束は与えられているが、踏み出す必要がある。

### 1. 3~4節

**Jos 1:3** わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたが足の裏で踏む場所はことごとく、すでにあなたがたに与えている。

**Jos 1:4** あなたがたの領土は荒野からあのレバノン、そしてあの大河ユーフラテス川まで、ヒッタイト人の全土、日の入る方の大海上までとなる。

### 2. 約束はすでに「与えられている」。

- (1) 「与えた」という表現は、完了形である。
- (2) 神の側では、すでに決定済みである。
- (3) しかし、経験的所有には行動が必要である。
- (4) 立っているだけでは、地は自分のものにならない。

### 3. 救済史的理解が必要である。

- (1) 出エジプト：救われた
- (2) 荒野：訓練された
- (3) 約束の地：相続する
- (4) 約束の地は、イスラエルの民が神の栄光を表すための舞台となる。
- (5) 私たちも同じである。

（6）救われたことと、勝利の歩みを生きることは、同一ではない。

III. 恐れはあるが、それを乗り越える方法がある。

1. 5～6節

**Jos 1:5** あなたの一生の間、だれ一人としてあなたの前に立ちはだかる者はいない。わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。

**Jos 1:6** 強くあれ。雄々しくあれ。あなたはわたしが父祖たちに与えると誓った地を、この民に受け継がせなければならないからだ。

2. ヨシュアが恐れなかったはずがない。

（1）強固な城壁、武装した敵、未経験の戦い

3. しかし、神は「わたしがあなたとともにいる」と言われた。

（1）勇気の根拠は、自信でも、経験でも、能力でもない。

（2）「主の臨在」である。

（3）「強く、雄々しくあれ」とは、性格命令ではなく、「信仰命令」である。

（4）主の臨在を信頼せよという信仰命令である。

IV. 戦略書ではなく、みことばが与えられた。

1. 7～8節

**Jos 1:7** ただ強くあれ。雄々しくあれ。わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法のすべてを守り行うためである。これを離れて、右にも左にもそれではならない。あなたが行くところどこででも、あなたが栄えるためである。

**Jos 1:8** このみおしえの書をあなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさめ。そのうちに記されていることすべてを守り行うためである。そのとき、あなたは自分がすることで繁栄し、そのとき、あなたは栄えるからである。

2. 勝利の鍵は「みことばに従うこと」である。

（1）みことばは、神のご性質を示すからである。

（2）神の道に歩む者は、神の守りの中にある。

（3）「成功」とは、世的な達成ではない。

（4）神の目的と一致した人生こそ、聖書的成功である。

3. みことばから離れるとどうなるか。

（1）預言者たちの出現

- (2) アッシリヤ捕囚
- (3) バビロン捕囚
- (4) メシアの到来とメシア的王国（千年王国）の預言

#### 結論：今日の信者への適用

1. 信仰は「過去の回顧」ではなく「神とともに前進すること」。
  - (1) 神は、「過去を惜しむのではなく、今、立ち上がり」と語っておられる。
  - (2) 信仰とは、今、神が語っておられる声に従うことである。
2. 荒野は定住の地ではない。
  - (1) 出エジプト＝救い
  - (2) 荒野＝訓練
  - (3) 約束の地＝相続
  - (4) 神の約束は、信仰によって踏み出すことで初めて現実となる。
3. 恐れがあること自体は、罪ではない。
  - (1) ヨシュアは恐れなかったのではない。
  - (2) 神は3度も「強くあれ。雄々しくあれ」と語られた。
  - (3) 信仰者も恐れる。
  - (4) 将来、健康、教会の行く末、社会の変化
  - (5) 恐れを克服する方法は、「主がともにおられる」という約束に立つこと。
4. 信仰生活の成功基準を、聖書的に再定義する。
  - (1) 世は、数、規模、効率、成果を成功と呼ぶ。
  - (2) しかし、神はヨシュアに戦術書、政治書、組織論を与えたかった。
  - (3) 神は「みことば」を与えた。
  - (4) みことばこそが神の御心を示すからである。
  - (5) みことばに従う者は、神の守りの中にあるからである。
5. 「定住生活」とは、安定ではなく使命の始まりである
  - (1) 約束の地は、神の栄光を表す舞台であり、靈的戦いの現場である。
  - (2) 教会の存在目的は、神の栄光を現すために生きることである。
  - (3) 新天新地に至るまで、神の民は「使命を帶びた民」である。